

Title	日本農耕文化の起源(森本六爾著, 葦牙書房版)
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1942
Jtitle	史学 Vol.21, No.1 (1942. 9) ,p.118- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19420900-0118">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19420900-0118</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書 評

## 日本農耕文化の起源

(森本六爾著  
葦牙書房版)

故森本六爾氏が宿痾と戦ひつゝ、獨力東京考古學會を主催し、斯界に不朽の功績を残されたことは、衆知の事實である。筆者は不幸にして、此の世を辭せらるゝことあまりに早く、遂に親しく警咳に接する機を逸したが、此の著作を繕き、逸事を耳にする度に、その秀拔なる著眼、透徹せる論旨に讚嘆し、又物心兩面の重壓に抗して、飽く迄斯學の爲に邁進せられた精神力の偉大さに、自らを顧みて、深く胸打たれるのである。森本氏没して此處に七年、その最も力を注がれた彌生式文化に關する晩年の諸論文を蒐めて、本書が刊行されたことは、我々にとつて、此の上なき快事と云はなければならぬ。

本書の題名は前記の如くであるが、讀者は單に農耕起源の問題のみならず、廣く或古代人の生活に關する知識を與へられるのであり、學術的には著者の彌生式文化研究の成果を、端的に把握することを得るばかりでなく、併せて優れた幾多の示唆を受けることが出来るのである。

内容は編者によつて便宜上、第一部總論、第二部各論(彌生式土器の研究)、第三部各論(農耕生活の諸形態)、第四部結論、の

四部に分たれ、各數篇の論文より成つて居る。即ち第一部は彌生式文化に於ける農耕を論じた諸篇を納め、特に我國に於ける農耕の始源を此の文化中に見出す點が強調されて居る。就中大和盆地の高地遺蹟と低地遺蹟とを採り上げ、その出土遺物の比較よりして、農耕の發達を論じた一文は、最も精彩を放つものと云へやう農耕文化といふ大間額に當面して氏はその一小部分に觸れたに過ぎず、その見解も又、必ずしも妥當なるものゝみではないが、他の人々に先んじて、これだけの業績を擧げられた點、眞に敬服の外はない。第二部に於いては彌生式土器の研究が纏められて居る。此の土器研究に當つて、所謂「飾られぬ土器」と「飾られた土器」の二者が存することを見出し、これを「煮沸形態」と「貯藏形態」即ち「動かして使ふ土器」と「動かさずに使ふ土器」と解し、農耕の盛行と結びつけられた所論は、正に氏の功績の第一に擧ぐべきものであり、必讀の論文である。第三部も各論の後半に充てられ、此處には彌生式文化人の農耕を中心とする生活の種々相が、或ひは銅鐸を、或ひは石庖丁を、住居を、織物を通じて考察されて居る。これ等の論攷はその結果に於いて、決して十分なる成功に終つて居る、とは云ひ得ないが、氏が遺物を通して彌生式文化そのものを闡明せんとした努力は、稍々もすれば單に遺物の説明、羅列に終らんとする我國學界の通弊より一步擡んでたものであり、我々の深い感銘を呼び起さずにはおかないのである。第四部に至つて結論と名付けられた「彌生式文化」「日本古代生活」の二篇がある。此處に上述の諸研究が一旦纏められて居り、特に後者は氏の絶筆とも云ふべく、永年の研究の結果が、驚

くべき手腕を以て、短文の中に餘さず織り込まれて居る。

以上述べた如く、本書は鬼才森本氏の擧げられた學的成果の結晶であり、優れた見解と有益なる示唆に富み、教へられる所が頗る多いのである。更に特筆すべきは全篇を通じて流れる、溢れるばかりの詩情であつて、これは氏の學を多彩ならしめると共に、讀者を魅了せずにおかぬ所以であり、我々は氏の天資豊なりしことを羨まずには居られない。又その故に本書は一般の人々にも、限りなき興味をもつて愛讀されること疑なく、啓蒙の書としても高く評價されるべきである、と信ずる。かく比類少き好著として敢て諸賢の一讀をお奨めする次第である。(清水潤三)

## 日本原始文化

(三森定男著  
四海書房版)

我國考古學界に於て最も缺けたる部分の一に高級な概説書の乏しい點が擧げられる。繩文式文化に關しては、古く中谷治宇二郎氏の『日本石器時代提要』の名著があるが、殆んど手に入り難く、特に彌生式文化以降には絶無と云つてよい。此の度三森定男氏が、自己の研究を纏める意圖を以て著はされた本書は、此の意味に於て、意義深きものと云はねばならない。三森氏は京都帝國大學に於て、親しく故濱田耕作教授の薰陶を受け、我國の原始文化を研鑽された少壯學者である。困難極まる此の種の執筆を敢行された努力に對し、先づ深甚な敬意を表する次第である。

さて次に内容を紹介し、併せて忌憚なき批評を加へさせていたゞることとする。本書は序章に始まり、日本文化成立の基礎、古

代の遺物、住居、聚落、葬制、生活技術、社會と宗教の七章及び、結びの言葉、より成る。

序章は『日本原始學の樹立』と題され、我國古代文化研究の基礎概念が説かれて居る。即ち考古學の本質を説き、原始時代を定義し、先史時代と神話との關係、或ひは未開社會を解説し、遺物の處理法に及んで居り、異論も多からうが、著者獨特の日本原始學が此處に成立するのである。第一章は日本文化成立の基礎として、我國に人類の出現したのは、遠く洪積世の時代であつたらう、と地質學上の論據より、舊石文化の存在を想定する、特色ある新見解に始り、此の結果當然中石文化の存在をも豫想し、暗に繩文式文化の初期をこれに比定して居られる等正に珍らしき所論と云はねばならない。第二章には遺物の概説がなされて居り、隨所に新しい見解が示されて居る。第一節としては土器が採り上げられ、最初に汎論として、土器の起源、製作、形態、裝飾等が論ぜられ、次いで繩文、彌生兩式土器が細説されて居るが、氏の最も得意とされる所として、本書の中核をなす感がある。此處には現在一部學者の間に唱へられて居る、煩雜な土器分類の大綱が、要領よく纏められて居り、土器に暗い者が概念を得るには極めて都合がよい。此の中各種繩文式土器が、單に一系統の序列による發展の結果現はれたものではない、とする所論は頗る興味があり、又繩文式土器の使用者が、そのまま彌生式土器の使用者であつて、異つた民族に非ず、と強調された所も、最近忘れられやうとして居た、故濱田博士の舊説を、新しき研究によつて復活されたもの、として意義がある。第二篇以下には、石器、骨角器裝身